高尾山報 令和元年9月号 毎月1回発行 通巻第668号

高尾山報

令和元年9月号

子ら集い 夏山寺に 一会あり

高尾山子供やまぶし修行体験会

法の水茎 (87)

大正大学講師　髙橋秀城

かつ消えて
石ともならぬ
星くだし
闇の現の
中空にして
（『浦のしほ貝』）

（花火が打ち上げられ）次々と消えて、石にもならない星が尾を引く。静寂の暗闇に戻っても、心はまだ落ち着かない、上の空のままで）

今年も日本全国で花火大会が開催されました。日本での花火の古い記録としては、室町時代（一四四七年五月五日）に、お寺の境内で花火と思われる「風流事」を行ったとか（『建内記』）、江戸時代（一六一三年八月）に、徳川家康（一五四三～一六一六）が城内で花火を見物したという記録などが残されています（『駿府政事録』）。江戸時代からとしても、既に四百年以上の歴史になります。

江戸時代初期の書物には、花火舟からの見物の様子が次のように記されています。

東西南北、あちらこちらで打ち上げられるので、ほとんど日中のような明るさで、玉火が発射する時の筒音や流星が上がる時の響き、人が騒ぐ声などによって、心静かに漕ぐ舟もない。

天竺（インド）、震旦（中国）はいざ知らず、日本が始まってから、今この御世は治まっていて、国土安穏、民衆は心安らかに愁いを知らない時だけれど、とりわけこの舟遊びは命の洗濯というものだろう。

（戸田茂睡『紫の一本』）

今と変わらぬ花火大会の光景ではないでしょうか。「命の洗濯」とあるように、世事の苦労から解放されて、寿命が延びるような楽しい心持ちになります。

冒頭の「かつ消えて」の歌は、江戸時代末期の熊谷直好（一七八二～一八六二）が花火見物の際に詠んだものです。歌の中に「星」と見えますが、花火の種類には、開花した途端に色を飛ばす「牡丹星」や、光跡を残して引く「菊星」など、「星」の用語が多く散りばめられています。色とりどりの花がパッと咲いたかと思うと瞬時に消えゆく光景は、まるで流れ星が輝き去るような早さです。

歌の下の句には「闇の現の中空にして」とあります。「闇の現」という言葉は「闇の中での現実。一寸先も定かでないこの世」を意味します。花火の星が一瞬にして消えたかと思うと、少し遅れて、暗闇の中から爆発音が胸に轟いたのでしょうか。その衝撃や、花火の残像、次の花火への期待など、さまざまな感情が入り交じった状態でしょう。「中空」には、暗闇の「虚空」とともに、落ち着かない「上の空」の心も込められています。

「闇の現」と似た意味合いに「一寸先は闇」という言い回しがあります。「一寸」は「短い距離」とともに、仏教語の「刹那」や「須臾」と同じように、意識されることのない「僅かな時間」も表しています。「人の一生は、ほんの少し先のことでさえ全く分からない」

花火は夏の夜空を古来より彩ってきた

折り折りの記 (121)

山の日の日照りの雨や山ガール

波多野　重雄

八月十一日は山の日、この日に相応しく朝から晴れたが、午後俄雨、暫くして嘘のような青空に急に涼しくなる、同時に私は、高尾山に「山の日」の山男となる。

わが国の登山者は年間一千万人近くが楽しむスポーツと言ふ。

平成二十八年（二〇一六）制定のこの新しい祝日はなんとなく影が薄い。お盆が近い所為か。私は高尾山の緑風に汗を流しながら一号路を登り、帰りは爽やかな風にのるミンミン蝉に送られた。

当日の登山者はケーブルカー五，四七二人、リフト三，五九五人。「健康登山者」二一〇人と家族連れ、山ガールでお山は賑わった。

最近はフランスのミシュランガイドの効果か、富士山と高尾山は観光スポットとなるが、日本の公園政策は欧米に比べ予算も人も余りにも嘆かわしい。

（髙尾山健康登山の会会長）

登高尾山（二）

七難即滅祈入山
諸堂参拝回峰澗
夕陽運冷待明月
七福即生得下山

厚木市　荒井　一雄

大樹の精

忍びよりたる夕暮れは
我と波長の合ひたるきぎし

高尾山を登る（二）

『七難即滅』を祈り入山す…
諸堂を参拝し、峰や澗を回る…
夕陽は冷気を運び、
明月の出づるを待つ…
『七福即生』を得て下山す…

という喩えです。

花火は打ち上がってから消えるまでに、五から十秒と言われますが、人生という道程も、見えたと思った側から、消えゆくものなのかもしれません。炸裂の音が、その短さを呼び覚ましてくれるような気もします。

人生の儚さをめぐっては、『徒然草』に次のように説かれています。

少しの時間を惜しむ人は少ない。これはよく物事を分かっているからなのか、単に愚かなのか。愚かな怠け者のために言うなら、一銭という金額は軽いといっても、これを積み重ねれば、貧しい人を富める人にできる。だから、商人は一銭を惜しむのだ。刹那という一瞬は意識されないといっても、これをずっと続けていると、命を終える時がたちまちやって来る。

だから、仏道を志す人は、遠い未来ばかりを思って月日を惜しむべきでない。むしろ、ただ今のこの一瞬（一念）が、空しく過ぎるのを惜しむべきだ。もし人が来て、お前の命は明日必ず失われるだろうと告げられたら、今日という一日が暮れるまで、何事を頼み、何事をするだろうか。我々が生きている今日は、その最期の日と違わないのだ。

一日のうちに、飲食・便通・睡眠・会話・歩行など、やむを得ないことで多くの時を使ってしまう。その残りはいくらも無いのに、無益な事をして、無益な事を言い、無益な事を考えて時を過ごし、月日を浪費して一生を送るのは、全く愚かなことである。

（『徒然草』百八段）

兼好法師が言うように、一日には睡眠など、生きる上で必要な、無くすことができない時間が多くあります。目覚めていても、常に瞬きといった無意識の暗闇を作り出します。「月日が経つのは早い」とよく口にしますが、この一瞬一瞬に目を向け愛惜することができたなら、人生は思った以上に長く豊かなものになるのかもしれません。

人天の楽は
なほし電光のごとし
須臾にすなはち捨つ
（『実材母集』）

（人と天人の悦楽は、まるで稲光のような一瞬のもの。僅かの間に結局捨て去る）

人はどうしても慌ただしい日常生活を送り、気づけばいくつもの年月を重ねてしまうものです。ただ、花火を見つめる眼差しのように、瞬間瞬間に心を留めることができたなら、人生は豊かな大輪の花となって夜空の星と輝くのでしょう。

（栃木北部教区普濟寺）

七月三日～七月八日

第十三箇度富士登拝修行記

法務課　杉山　宗嵩

令和元年七月三日から八日にかけて、第十三箇度霊峰富士登拝修行が行われました。私にとって高尾山薬王院に入山し初めての富士登拝修行となり、高尾山薬王院から富士山麓の富士吉田市にある御師の宿、大国屋までの前半の三日間に参加し、道中総距離にして約七十キロの道のりを徒歩練行しました。

今回の富士登拝の参加が決まり、先輩方には「下道だからって油断しない方が良いぞ」「アスファルトは辛いぞ」などの話を聞き、足は平気だろうか、しっかり歩けるだろうか、皆さんに迷惑はかけないだろうかと不安を抱えたまま当日を迎えました。

富士登拝修行は水行から始まります。高尾山蛇瀧水行道場にて心身を清めた後、祈祷殿において駈入柴燈護摩供を厳修します。皆様の諸願成就の為の代参守を御加持し、修行者の道中安全、修行満足を祈念しました。その後、山上薬王院まで練行を行います。途中、金毘羅社、神変堂にて法楽を行い、薬王院に到着します。この日は小雨が降っていたものの、歩くにはちょうど良い天候で、身体の疲れも心地良いものでした。

二日目は、高尾山から山梨県上野原市秋山にある宿泊場所、中央館までの練行です。早朝の四時半に薬王院大本堂での朝のお勤め、道中の安全を祈念したのち、法螺貝の音色と共に高尾山浅間社に続く階段を登って行きます。高尾山浅間社にて出立式の後、いよいよ富士山に向け練行の始まりです。

少し歩くとすぐに山頂の十三州大見晴台に到着します。この場所は晴れていれば富士山も見えますが、この日は霧がかかり絶景を見ることが出来ませんでした。雨に打たれながら小仏城山を抜け、一時間ほど山を下ると毘沙門天が祀られている善勝寺に到着します。お寺の敷地をお借りして朝食になります。朝から雨に打たれて何も食べずに三時間ほど歩いた身体には、雨風の凌げる場所や、御住職の温かい御接待はとても有り難いものでした。

毘沙門天様に感謝をしつつ、善勝寺を後にして次の宿泊場所である中央館まで歩みを進めます。ここからは舗装された道です。歩き始めは山道とは違い歩きやすく良いテンポで足を進めていたのもつかの間、徐々に足に痛みを感じ、これが先輩の話していたアスファルトの怖さなのだと分かりました。

時間が経つにつれ痛みも強くなってきた頃、道の先に中央館の看板が見えた際は何とも言えない思いで一杯でした。普通の階段を足が上がらずになかなか登れなかった時には、自分の情けなさを強く感じました。

三日目は、中央館から大国屋までの練行です。私にとっては富士登拝修行の最終日。昨日の疲れ、足の痛みは少し残るものの、朝六時に出発です。天気は曇り。歩くのには最高の天気です。道中にある各神社で法楽し、少しずつ足を進めます。今まで全く見えなかった富士山が雲の隙間から顔を出した時には、自然と手を合わせていました。

富士山に見守られながらいよいよ最後の上り坂です。悔いのないよう、一歩一歩をしっかりと踏みしめ、先に大国屋で待機していた高尾山薬王院の先輩方の顔が見えた時は、今までの疲れがすべて消え、大きな達成感に包まれました。

今回、最後まで参加出来ない事は本当に残念でしたが、先輩方に私の思いを託し一足先に高尾山へ戻って参りました。帰りは車に乗り、二日間かけて歩いた道のりを僅か一時間半ほどで着いた時には、今までの疲れがすべて消え、大きな達成感に包まれました。

今回、三日間富士登拝修行をし、初めは不安しかなかった私が最後には喜びと感動に満ち溢れていました。普段の生活では当たり前に食べている物、飲んでいる物、使っているものの有難さを感じ、何よりも疲れて辛い時に声を掛けて下さった先輩方、御接待をして下さった方々の温かさ優しさを肌で感じる事が出来ました。私一人ではこの三日間の修行を終える事は出来なかったと思います。この貴重な体験、気持ちを今回、参加出来なかった皆様に伝え、私自身もこの事を忘れずにこれからの生活、仕事に励んでいきたいと思います。

合掌

蛇瀧にて水行を修す筆者

三日間を共に過ごした仲間達（大国屋前にて）

富士登拝代参守のご案内

この代参守は、高尾山から続く祈りの道を、修験者によって運ばれ、霊峰富士山頂にて法楽し、本年一年の、諸縁吉祥・諸願円満の為に、ご祈念致します。

（授与料）一体壱千円以上
（代参守と碑伝合わせて）

〈申し込み方法〉

山上・御護摩受付所又は、葉書に郵便番号・住所・氏名（必ずフリガナを明記下さい。）電話番号を明記の上、左記までお申し込み下さい。

※締め切は、七月末日とし、八月以降の申し込みは、来年度分とさせて頂きます

〒一九三―八六八六
八王子市高尾町二一七七
大本山高尾山薬王院内
富士事務局

碑伝

代参守

柴燈大護摩供御壇木特別志納御案内

当山では毎年三月第二日曜日に、高尾山修験道による火渡り祭が、高尾山麓において盛大に執り行われます。

この勝行にあたり、御信徒の皆様方より柴燈大護摩供にて使用される、御本尊・飯縄大権現様の功徳を顕す御壇木のご志納を一本一万円にて募っております。

尚、ご志納の証として、ご芳名を薬王院境内に一年間掲示させて戴きます。

御志納方法についての詳細は、高尾山薬王院信徒課までお問い合わせ下さい。

TEL〇四二―六六一―二二五

観音菩薩の宗教 ㉑

国際教養大学特任教授　金岡秀郎

忿怒形の馬頭観音菩薩

仏教の仏や菩薩、明王や天部の神々など、多様な尊格をその像容から分類すると、優しい顔をした「慈悲相」「菩薩相」と、恐ろしい顔をした「忿怒相」「瞋怒面」に大別することができる。この二相は仏教が人を済度、教導するさいの二種の方法に基づいている。仏教では、相手を否定せずそのすべてを受け入れて導くことを摂受といい、どうしてもいうことをきかず悪をなすような相手を体罰もふくめ厳しく従わせることを折伏という。前者は聖観音菩薩や地蔵尊などの柔和な尊顔に現れ、後者は不動明王や愛染明王などの恐ろしい相貌に代表される。

蓋し、褒めることと叱ること、寛容と厳格は、躾や学校教育において教導の両輪であろう。とはいえ現代の日本では、一九七〇年代のアメリカ教育学の影響もあって体罰が厳禁となり、時には口頭の叱責すらも否定されてきた。その反面、甘やかしとも取れるような子供の「自由」や「主体性」が尊重されるようになった。それが政策として現れたのが「ゆとり教育」であった。方や本家のアメリカでは極端な放任や子供の「自主性」の尊重が学級崩壊や犯罪の増加をもたらしたと判断され、ゼロ・トラレンスと称する厳格な教育を復活させて教育を再生させたという（加藤十八『アメリカの事例から学ぶ学校再生の決めて―ゼロトレランスが学校を建て直した』学事出版、二〇〇〇年）。トラレンスとは「寛容性」の意で、それがゼロ、つまり悪事は決して許さず、厳しく叱り処断することを指す。これは、かつてのキリスト教の教育における「愛の鞭」とか「タフ・ラブ」（厳しい愛）と呼ばれる指導法の復活ともいえよう。日本でもかつては悪事に対して毅然と望むことが、社会全体で共有されていた。四〇年ほど以前、禅の高僧・関大徹は幼稚園の園長も務め、「ガキは大いに叩いてやれ」と道破した（関大徹『食えなんだら食うな』ごま書房新社、二〇一九年）。ただし、仏教から見れば慈悲と忿怒が一体でなければ、叱責は単なる暴力・暴言に堕してしまう。教導の難しさはここにある。

先に触れたように、聖観音菩薩は慈悲相の好例である。例えば大和の薬師寺の聖観音立像（国宝）の尊顔は、いかなる相手のいかなる行為も怨し、穏やかに受け入れる摂受の相を顕す。しかし人は寛容のみでは導けず、また救われない。そうした時、観音菩薩は忿怒相で現れることもある。観音菩薩が三十三もの化身をもって示現することや（拙稿「観音菩薩の宗教⑨」）、変化観音として観音自身に種々の独立した菩薩が生み出されたのも（拙稿「観音菩薩の宗教⑩」）、ヒンドゥー教の化身思想の影響があるにせよ、仏教では多彩な衆生を救済するための方便と

モンゴルの三面六臂の馬頭明王。頭上に三つの馬頭を冠する。作者・成立年不詳。アップリケ。ボグド・ハーン博物館蔵（Цултэм, Монгольская Национальная Живопись"Монгол Зураг", Улан-Батор, 1986）

説かれている。そのひとつが難化の衆生を導く忿怒相の馬頭観音である。

馬頭観音は、恐ろしい相貌と武器で破邪を行う観音菩薩として尊崇されてきた。日本の平安時代に成立した天台の六観音や真言の七観音（拙稿「観音菩薩の宗教⑯」）に含まれる馬頭観音は、大方が想像する観音像とは異なる忿怒相である。馬頭観音の像容は、一面二臂・三面二臂・四面二臂・一面四臂・三面八臂・四面八臂など種々の図像が知られており、多くの場合、忿怒の形相の頭上に馬の首を載せている（井上一稔『日本の美術5』至文堂、一九九二年）。また、額には縦長の目があり、通常の両眼と合わせ三眼を有することが多く、悪事・悪人を探し、睨みつけている。

馬頭の意味について『大日経疏第十』は、「観世音菩薩は一切衆生の無明業障を噉食しつくして、もろもろの恐怖を摧破するために馬頭を現ずる」と説き、また唐・不空訳『聖賀野紇哩縛大威怒王立成大神験供養念誦儀軌法品巻上』は、馬頭観音が「六道四生の生老病死の苦を盡滅」し、「噉食盡滅すること」は、「痩せ飢えた馬が草を食して余念がなきがごとし」と述べている（後藤大用『観世音菩薩の研究』山喜房仏書林、一九五八年）。端的にいえば、馬が草を食べるように衆生の苦しみを滅し尽くしてしまうという意味である。また、『大日経広釈』には「馬頭と称せらるるものをとは、法に遍入する智が速やかにして早きこと馬の如きと有情の利をなすことに速疾なること馬と等しき故に馬頭と名づくるなり」（酒井眞典『酒井真典著作集2―大日経広釈全訳』法蔵館、一九八七年）とある。すなわち、馬頭と呼ばれるのは仏法に入るための智慧が馬の走るのと同じように速く働き、衆生の利益をはかることが馬のように速いからということである。

馬頭観音はサンスクリット語でハヤグリーヴァ（Hayagrīva、何耶揭梨婆・賀野紇哩縛）といい、「馬の頸」もしくは「馬の頸を持つもの」を意味する。この名称はもとはヒンドゥー教のヴィシュヌ神の異名にも使われ、忿怒の相はシヴァ神の特色にも通ずるもので（宮治昭『仏像学入門』春秋社、二〇〇四年。佐久間留理子『観音菩薩』春秋社、二〇一五年など）、その源流はヒンドゥー教に淵源するものと考えられている。さらにその起源は『リグ・ヴェーダ』など、インドの古代神話における馬崇拝にあるとも指摘され ている（R.H.van Gulik, Hayagrīva: The Mantrayanic Aspect of Horse in China and Japan, Brill, 1935。後藤、前掲書）。ハヤグリーヴァ、もしくは馬頭観音の系統をたどるのは小論の能くするところではないが、上述の仏典による説明は、ヒンドゥー教の馬の神を受容し仏教化した後の説明と捉えることもできる。

インドにおけるハヤグリーヴァの作例は観音菩薩の眷族として見られ、それが後に単独尊として尊崇されるようになった。密教においては馬頭観音は馬頭明王とも称された。日本における馬頭観音の信仰は奈良中期ごろからと推測され（佐久間前掲書）、鎌倉期には福井の中山寺（真言宗御室派）の木造馬頭観音坐像のような名品も作られた。日本では民間信仰と習合し、近世以降、「塞の神」としての性格も併せ持つようになり（井上前掲書）、処々に石像が建てられた。こうした信仰は道祖神と地蔵尊の習合と類似する（拙稿「地蔵尊の宗教⑦」参照）。さらに、馬との関連から動物を守る尊格としても尊崇され、東京の八王子乗馬倶楽部の庭内では石像を見ることができる。同じく八王子の妙薬寺のペットの墓地正面には、馬頭観音の種字であるカン（ऊ）が彫られている。

遊牧的牧畜国家のモンゴルでは、破邪や煩悩滅の思想とともに馬の守り神として篤く崇拝され、多くの造像、作画がなされた。チベットやモンゴルではハヤグリーヴァは変化観音とせず、忿怒尊の一種に分類されており、馬頭明王と見るほうが適当とされている（田中公明『チベットの仏たち』方丈堂出版、二〇〇九年）。ハヤグリーヴァはチベット語ではタムディン（rta mgrin）すなわち「馬の頸、馬の喉」と訳され、モンゴルでは転訛してダムディンと発音される。馬への敬愛とも相俟って、ダムディンはモンゴル人の人名にもしばしば用いられている。

高尾山子供やまぶし修行体験会

八月四日(日)、今年で十六回目を迎える、高尾山子供やまぶし修行体験会が、約八十名の子供が参加して行われた。

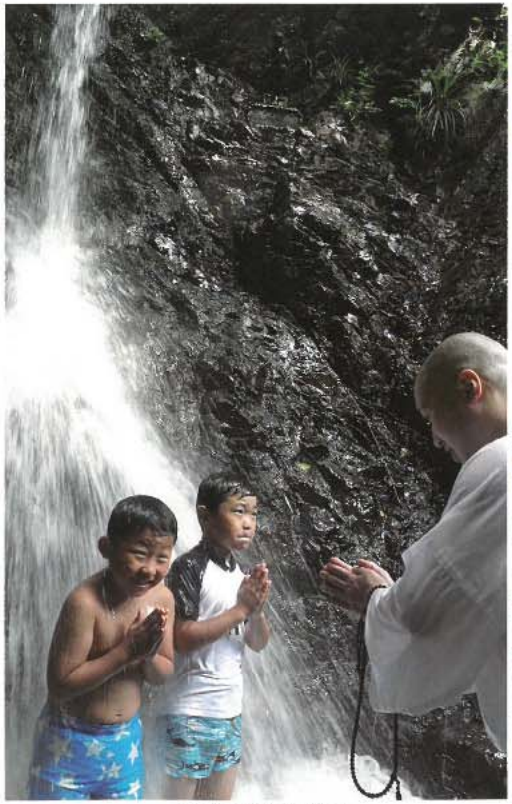
保護者達と別れ、山伏と共に山麓の不動院から琵琶滝水行道場を目指して出立。水行では滝に打たれながら御本尊様とのお約束として山伏から問いかけられた、「お友達と仲良く出来ますか?」「好き嫌いせずにご飯を食べられますか?」という質問に大声で、「はい!」と答えていた。

水行の後には、琵琶滝から十二丁目茶屋前までの急な山道の琵琶滝道を、一時間以上かけて登る徒歩練行を行った。遅い梅雨明け後の真夏の暑さに負けずに登り、時には出会った登山者の方に元気よく挨拶をした。

薬王院に到着すると大本堂にお参りして昼食となった。昼食では精進カレーライスを食べ、大勢の子供達がカレーライスをお代わりしていた。

昼食後には腕輪念珠作りを行った。出来上がった腕輪念珠は大きさ、色使いが様々であり、自分だけのオリジナル腕輪念珠となった。その後山麓にて厳修された柴燈護摩供に参加した。その際に、代表者が御本尊飯縄大権現様へ本日の修行の成果を今後の生活に生かすことを約束する「誓いの言葉」を奉告した。

不動院での閉会式では、保護者達の見守る中、一日の修行を終えた証となる、「修了証」が授けられ、無事に帰宅の途に就いた。


元気よく滝行を修す

山麓で行われた柴燈護摩供

急な山道を暑さに負けず登る

晩夏の高尾山でオンリーワン体験

体験楽習フェア八王子二〇一九in高尾山

主催・公益社団法人八王子観光コンベンション協会

八月二十四日と二十五日の二日間、公益社団法人八王子観光コンベンション協会主催のもと、高尾山麓の「高尾599ミュージアム」をメイン会場として**体験楽習フェア八王子二〇一九in高尾山**が開催され、様々な体験プログラムがオンリーワン体験として用意されました。

体験楽習の一環として、二十四日は山麓の不動院で茶道体験と写経体験、二十五日には山上の薬王院で精進料理と山伏による境内案内、不動院においても「とんとん昔語り部の会」による、高尾山の昔話会が行われました。

当日の気温は高かったものの、吹き抜ける風は秋を感じさせる涼しさで、国内のみならず多くの海外の方々も高尾山を訪れ、楽しまれました。

山伏により境内案内が行われた

「とんとん昔語り部の会」による昔話会

京王電鉄株式会社主催

高尾山峰中修行体験合宿

去る八月一日(水)～二日(木)に、第四十七回高尾山峰中修行体験合宿が京王電鉄㈱主催にて行われ、約五十名の子供たちが参加した。

子供たちは高尾山頂で自然観察をして記念撮影を行い、室内でのゲームを楽しんだ。

翌早朝には御護摩修行・坐禅・法話聴聞・写経、最後には琵琶滝にて滝行を行い、各修行を通じて心身共にたくましく鍛えられた。

大本堂内で早朝に坐禅の修行をする

葵の祈祷所

紀伊徳川家と高尾山 ㉚

明治大学博物館　外山　徹

藩士との交流 I

これまでは、紀伊徳川家当主との関わりを中心に祈祷所の歴史をたどって来たが、仲介に立つ家臣の姿がそこかしこに垣間見られた。今月は補遺編の第一回として和歌山藩士と高尾山との関わりを拾ってみたい。

浅井庄左衛門

この連載の中でも、最も頻繁にその名が記されたのが浅井庄左衛門昌凭（まさより？）であろう。八代藩主重倫の在任中、また、隠居後においても高尾山との間を取り持ってきたのがこの人物である。没年が寛政二年（一八〇〇）、享年が数え七四歳と判明しているので、享保二二年（一七二七）の生まれということになり、主の重倫より一九歳も年長だったことになる。薬王院隠居湛玄が重倫から直筆の書状を受け取った時点で満四四歳。

重倫の出家により護摩札献上が止まった天明六年（一七八六）までの約一五年間にわたり、浅井と高尾山との間では頻繁な通信があり、現在、薬王院文書の中に夥しい数の書状が残っている。安永二年（一七七三）の秋に重倫が和歌山へ帰国した際には浅井も同道し、江戸藩邸を離れることになるが、引き続き高尾山との間に音信を重ねた。書状の筆跡は複数にわたり、右筆（書記役）が記したもの以外に、書きぶりから浅井の直筆も含まれているものと推測される。

そして、浅井自身、実際に高尾山を訪れていることがわかっている。年不詳二月一八日付の書状には「登山いたしそうろう節、拝み申しそうろう不動尊厨子とも再興の儀につき」という一文がある。ここで言う不動尊とは、修復を願い出ているわけだから六代藩主宗直が寄進した不動尊木像ということになろう。後年の『新編武蔵風土記稿』（一八二二・多磨郡之部）成立）には、この不動尊像は護摩堂に祀られているとあるので、仮に半世紀前も同じ祭祀形態であったとすれば、浅井は仁王門をくぐった大本堂のある平地にて、現在は奥之院不動堂となっている堂の階段を上って参拝したことになる。

庄左衛門の履歴

藩主の側近く仕えた浅井庄左衛門だが、出仕の始めは元文五年（一七四〇）、一三歳の時に表小姓となっている。藩主は六代宗直の頃である。宝暦九年（一七五九）に家督を継ぎ、禄高は二〇〇石と中堅の藩士であった。明和三年（一七六六）に御小姓頭となり三〇〇石に加増。重倫の藩主就任翌年のことだった。その仕事は藩主の身の回りの世話をすることだが、重倫の信任厚く「内証向き御用」を務めたと記されている。明和八年中之間番頭格兼任後も「御内証向きの御用も只今までの通りあい勤め」というのは、機密を扱ったというよりは公私にわたり重倫の用を務めたという意味だろう。

和歌山帰国にあたって湛玄に対し餞別の礼を述べる浅井の書状

安永四年の重倫隠居にあたっては「大殿様にてあい勤め」と、そのまま重倫の小姓頭に移行している。出仕以来一貫して小姓の役職にあり、天明六年の重倫出家に際しての書状にも名を連ねているので、その時点でなお最も御側近くに控える藩士であった。重倫の人となりについては以前に触れたことがあるが、その下に仕えるというのはよほど出来た人物だったに違いない。重倫の豪放磊落な、あるいは短気で激昂しやすい、さてまた病弱で死の予感に怯える性格の何れにあったとしても、気の休まる暇はなさそうだ。

そうした主君の下に二〇年以上も仕え続けるのは並大抵のことではなかった筈だが、浅井のような人物の存在は重倫の人物評にも関わって来るのではないか。天明六年の書面に連名した中では、桑村彦太夫、有本半左衛門といったそれ以前の薬王院文書にも名の出てくる藩士らも、浅井と同様に隠居後も重倫の許に勤め続けていたことになる。

村岡八蔵

天明六年の重倫出家によって途絶えた護摩札献上が寛政九年（一七九七）に再開された際の紀州家側の当事者が、江戸藩邸御広鋪御用人の村岡八蔵良長である。薬王院は護摩檀家の井川忠三郎の仲介で村岡と面会をすることが実現した。その際の記録には村岡宅への訪問の様子が、土産の持参や夕刻村岡が退勤の後、面会となったなど詳細に記されている。その頃、紀州家の財政は相変わらず逼迫しており「厳しき御省略中」にもかかわらず祈祷所が再興されたのは、村岡個人の裁量もあってのことだろう。

村岡八蔵は享和二年（一八〇二）に数え八〇歳で没しているので、山主秀神と面会した当時、すでに満七四歳の老齢であった。生年をさかのぼると享保八年（一七二三）であるから、先の浅井庄左衛門より四歳も年長である。一〇歳の時、藩主宗直の三男孝三郎の同朋衆として出仕。この時は禄高五石。寛延四年（一七五一）に書役。その後、右筆を経て宝暦一三年（一七六三）に致姫様御広鋪番となる。致姫は重倫の妹である。この時二〇石に加増されるが、四十路にして下級藩士の位置にあった。

明和二年（一七六五）、清信院付御礼式中奥御番格となる。清信院は重倫・致姫の母である。村岡は清信院の下でとんとん拍子の出世を果たす。その年の暮れには禄高八〇石に三〇〇石の足高となる。足高は役職手当である。禄高の低い者を高位の役職に登用する際に行なわれ、八代将軍吉宗の策としても知られる。同五年、清信院とともに和歌山へ帰国。安永四年（一七七五）は重倫隠居の年だが、九代治貞の御取次として江戸藩邸へ復帰。この後、江戸と国許を往来する。

寛政三年（一七九一）、御勝手向御用筋御年番という財務方の役職に就く。同六年三月に藩邸の奥向きである御広鋪へ「御詰」、九月には御勝手筋を離任して御広鋪御用人となった。翌七年には江戸勘定奉行格を兼任。薬王院の面会を受け祈祷所を再興した時にはこの役職にあった。つまり、財政支出の裁量権を握る立場にあったのだ。紀州家お出入りの関係を結んでいた井川忠三郎は藩邸の内情によくよく通じていたのだろうが、恰好の人物へ取り次いだわけである。

村岡の履歴の中で興味深いのは清信院・致姫と接点を持っている点である。清信院は七代藩主宗将の側室。根来寺中興の檀越として知られる人物で、墓所も根来寺にある。その信心深さは子の重倫・致姫にも影響を与えたようだ。致姫は福井藩主松平重富に嫁いでいるが、後年、「江戸田舎日護摩講中元帳」（文化六年・一八〇九）に松平越前守の名が見られるのは、この致姫が介在した可能性が高い。

財政難の折柄、祈祷所の再興が成ったのは、村岡が財務の権限を握っていたというだけではなく、また、井川忠三郎による周旋だったからということでもなく、彼自身も清信院の影響を受け、信心に篤い人物であったことが推測される。あるいは、井川は村岡のそうした性格をも知っていたのかもしれない。これは想像でしか無いが、根来山興教大師作とされる不動尊木像が六代藩主宗直によって寄進されていると言われれば、心に響くことだっただろう。

おことわり　本連載では史料の引用について、読みやすく原文に手を加えています。

おはなし散歩道

青虫とかたつむりのお山参り

柏市　木村　研

春がとうに過ぎたころ、高尾山の麓で、やっと青虫が生まれました。

仲間達はもう、誰もいません。青虫は体をくねらせて、仲間を探しに行きました。

葉っぱに登ってみると、大きな家を背負ったかたつむりが、そろーり、そろりと歩いていました。

「ねえ、ねえ、僕の兄弟知らない？」

青虫が聞くと、かたつむりは、長い角ををにゅーっとのばして、

「なーんだ、青虫のおちびさんか、お前の仲間なら、もうとっくに山のお花畑に行ったよ」

と、言いました。

「山のお花畑？」

「ああ、高尾山の上の方だと聞いたがなあ」

かたつむりは、気の毒そうに言いました。

後ろを振り向くと、雲の中まで届きそうな高い山がありました。それが高尾山でした。

そのお山は、たいそう御利益がある、と人間たちが、今日もたくさん登っています。

「そんなら僕も登ってみるよ」

青虫はえっちらおっちら登り始めました。

するとかたつむりが

「お前一人じゃ心配だ、わしも一緒に登ってやろう。わしも一度はお参りしてみたかったからなあ」

と、そろーり、そろりと追いかけてきました。

こうして二匹のお山参りが始まりました。しかし、青虫とかたつむりのことです。時間のかかることといったらありません。朝早くから登り始めても、すぐに夜になってしまいます。

夜になると、かたつむりは家の中でゆっくり休みましたが、家の無い青虫は、道端の葉っぱに包まって眠りました。

何日か経つと、青虫は疲れました。葉っぱにつかまっているだけでも、意識が薄れていくようです。だから落ちないように糸を出して体に巻き付けるようになりました。すると、次第に体の自由が利かなくなり、とうとう動けなくなってしまいました。

「青虫のおちびさん、寝たらだめだぞ。おい、おきろ、おきろ」

かたつむりがゆすってみましたが、青虫は動きません。ぐっすりと眠っています。

かたつむりは青虫の隣で、青虫が目を覚ますのを待つことにしました。

何日も、何日も待ちました。雨の日も、暑い日も、風の強い日も、じっと待っていました。

そんなある朝のことです。糸で固まっていた青虫の体が、ぶるぶるっとゆれました。そして、背中のほうにひびが入ってきました。

「あっ、おちびさん、大丈夫かい？」

かたつむりが声をかけると糸の塊が割れて、仲からきれいなちょうちょが出てきました。

「おちびさん、お前も、とうとう、ちょうちょになったんだね」

かたつむりが目を丸くしていると、ちょうちょになった青虫は、

「ぼく、ちょうちょになったんだね」

と、嬉しそうに、羽をひらひらさせ、高く、高く飛んで行きました。

高く上がると、お山の上の方に、きれいな花の咲いているところが見えました。

そこにはたくさんのちょうちょがいました。

「お兄さんだ、おーい」

青虫になったちょうちょが声をかけると、たくさんのちょうちょが集まってきて、

「やっと目が覚めたかい」

「おはよう」

「おねぼうさんだな」

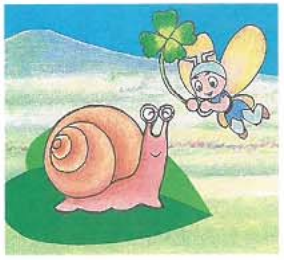
と、言いました

「みんなに会えて、良かったなあ。青虫のおちびさん、もう兄さん達と、はぐれるんじゃないぞ」

そう言うとかたつむりはまた、ゆっくり、ゆっくりお山を登り始めました。

「ありがとう、僕たち、もっと遠くのお花畑にいるんだ」

小さなちょうちょは、さようならをするように、かたつむりの上を二度三度大きく回って、お兄さん達の後を追いかけて、高尾のお山を越えていきました。



（挿し絵・小出　茂）

高尾山物語 ⑰

小仏関所

絵・橋本豊治

富士關役所構之道具尺木以下
於高尾山可取之、但別當手代を
出可為切之旨、被仰出者也
仍如件

（高尾山薬王院文書　北条氏照印判状）

北条氏照は西方からの侵攻に対する防衛のため、国境の拠点整備を行い、天正十年（一九八二）頃に八王子城を築いた。

その周辺整備の一つとして天正年間（一五七三年～一五九二年）頃に武蔵国と相模国境の要衝であった小仏峠の頂上に関所を設けた。

北条氏滅亡後の天正十八年（一五九〇年）に、関東地方を所領とした徳川家康により現在遺構の残る麓の駒木野に移設されて整備された。

「高尾山薬王院文書」中の天正十七年（一五八九）の印判状には、高尾山内で材木伐採を認める書状が残されております。

この措置は、豊臣秀吉との戦争が避けられないと見た氏照が、小仏峠の防衛強化のために行ったとみられます。

浮世荒波
もまれて今に
人格向上
しつつあり

飯綱山火まつり

八月十日　於・信州飯綱山麓

去る八月十日、信州飯綱山麓大座法師池周辺にて、当山中原修験部長祇師の下、飯綱山火まつりが挙行されました。

次第に暗くなる夕暮時、柴燈護摩壇から立ち上る炎が道場を照らし、参列の皆により、祈りが捧げられました。

大勢の参列者が見守る中、厳粛に法要が執り行われた

高尾山季節散歩

暦の言葉
「七十二候」
鶺鴒鳴
「せきれいなく」
九月十二日～九月十六日頃

セキレイは水辺を好んで営巣しますが、民家の軒下や石垣にも、巣を作る鳥です。

セキレイはまた、結婚についても関係深く、日本書紀ではイザナギとイザナミの仲を取り持った鳥として登場します。

今月の風物詩
秋の七草

七草といえば「七草粥」の春の七草が有名ですが、実は秋にも七草があります。この七草は「食べる」というよりも、「見る」ことを楽しむもののようです。撫子・葛・桔梗・萩・藤袴・尾花・女郎花の七種であり、万葉の時代から歌に詠まれてきました。

読者投稿
米寿（八十八歳）を迎え、
卒寿（九十歳）を目指し
あきる野市　山崎　右三

五月晴れ
卒の峰高尾山
仰ぐ米寿尾根

育まれ
嵐日照りを
越えにけり
黄金に実る
米寿年

一歩一歩煩悩滅除

百八の階段を昇り、悩みや煩い事を取り除きましょう

八十段　**威張らないこと**

威張っている人は、一見堂々としていて立派で偉い人のようにも見えますが、自分に自信がないことの裏返しということが良くあります。「弱い犬ほどよく吠える」との喩えにならないように気をつけましょう

健康登山者投稿作品
高尾山で出合った人々
せと　ちえこ

奉納御礼
刀剣手入れ

八月二十二日、本年の四月に平成最後の下原刀「高尾山南無飯縄大権現」を御奉納頂いた、NPO法人「武州のよりあい」の磯沼孝会長らが高尾山を訪れ、高尾山に伝わる刀剣の手入れをして頂きました。

高尾山には奉納された刀剣が多く残されており、古くは室町時代の作品もあります。

刀剣は人間の手脂で錆びてしまうため、両手に手袋を着け、古い油を打粉で取り、刀の状態を確認しながら防錆のため丁子油を塗ります。

「武州のよりあい」の皆様方におかれましては、茲に重ねて御礼申し上げます。

刀剣手入れの様子

厄年を過ぎた御信徒の皆様へ

六十才の厄年を過ぎたなら
一年・一年を
七十才を過ぎたなら
暑さ、寒さを
八十才を過ぎたなら
春夏秋冬を
九十才を過ぎたなら
一日・一日を
気を付けられ
日々を大切に
圓満にお暮し下さい

当山では皆様の
身体健全
（寿命長久）を祈念して
福壽圓満の
御護摩を
お申し受け致しております。

◎健康登山の皆様へ
高尾山報投稿の御案内

御護摩受付所では、皆さまの『健康』に関する思いや思い出・習慣、又は『健康登山』を通じて経験した出来事などの心温まるお話を聞かせて頂いています。

そこで、皆様のお話を多くの方々にお届けできますように、御護摩受付所に「投稿箱」を設置致しまして、皆様から投稿頂いたお話や作品を、『高尾山報』に掲載させて頂いております。

その他、おもしろい体験・変わった出来事・ポエム・俳句等どんなお話でも結構です。是非お聞かせください。御協力宜しくお願い致します。

※　投稿頂きました作品は全て掲載できるよう努めますが、当山の判断で掲載しない場合もあります。また、多くの方に投稿頂きました場合、掲載までお時間を頂く場合がございますことを御了承下さい。

『高尾山健康登山の証』のお勧め

年間約二百八十万人の人々が訪れ、「世界一登山者の多い山」として知られている高尾山。

登山者の皆様の励みになれば、との思いから平成十一年から健康登山を始め、いまでは約五万人の方々が会員となられております。

期限はございませんので、御自分のペースでお楽しみください。

また、一冊に付き二十一回スタンプを押すページがあり、終了したことを満行と言います。満行されますとお祝い膳として、精進料理の御接待や、健康登山者限定の記念品などと交換もできます。

帳面……七百円
スタンプ…百円

お護摩修行のおすすめ

皆様の諸願成就を祈願する

高尾山では大本堂に於いて、毎日御護摩修行を行っております。

お護摩修行とは、護摩木という特別な薪を大導師が御護摩の炎の中に投入し、あらゆる煩悩を焼き浄めるために行われます。そして、御信徒の皆様の祈りが御本尊様に届けられ、皆様の諸願が成就するという修行であります。

御護摩修行を行った方には、御護摩札が授与されます。

大切にお持ち帰り頂き、お供物と共に自宅等に奉安礼拝して、一心に御宝号「南無飯縄大権現」とお唱え下さい。

苗木奉納

古来より高尾山の御信徒は、自分のお願いが成就した時に感謝とお礼の意味を込めて、苗木を奉納するという習慣がありました。今日でも、お杉苗奉納は続いており、参道の大杉原には一年間掲示される杉苗奉納者の芳名板が、板塀のように並んでおります。

高尾山では寺法において「殺生禁断」を第一義に、むやみに草木を切ることを厳しく戒めてきました。私達は信仰心と共に大自然を守り、また大自然から守られつつ、共存共栄し、本日の景観を造りあげてきたということを、忘れてはならないと思います。

尚、毎年**十二月十日**までに、**一万円以上**を御奉納頂いた方のお名前を、翌年より掲示させて頂いております。

高尾山のお護摩札とお供物

(大) 10,000円 (中) 5,000円 (小) 3,000円	お護摩 3,000円以上	お護摩 5,000円以上	お護摩 10,000円以上	特別大護摩 30,000円以上	開帳大護摩 50,000円以上	特別開帳大護摩 100,000円以上

家内安全(家)
商業繁昌(商)
事業繁栄(事)
交通安全 車内用札(車・交)
交通安全 神棚用木札(木・交)
身上安全(身)
災難消除(災)
厄除(厄)
身体健全(体)
当病平愈(病)
開運(開)
良縁成就(縁)
安産成就(安)
入学成就(入)
心願成就(心)
御礼(礼)
奉納杉苗(杉)

お護摩の願事

お願い事は一体一願意とします。

併願(二願意)は一万円より受け賜ります。

但し、五千円で家内安全と商売繁昌のみ併願とさせて頂きます。

お護摩札には年令・生年月日等は入りません。

一一内の略体を使用しません

高尾山慶賛会入会のおすすめ

「物で栄えて心で滅ぶ」という言葉は、昨今の世相を端的に表現しているようです。

経済発展の代償として、公害、交通禍、その他様々な弊害が生じ、経済的には豊かになりながらも、心は貧しく刺々しくなり、社会全体が人々の「迷いの心」で覆われております。かかる時代こそ、心に「うるおい」を与える存在として信仰心が必要であり、信仰の温かい心を通じて愛情、尊敬、感謝などの心を養い、人間味豊かな社会を建立したいものと念願しております。

高尾山は現在ミシュラン三つ星を頂き、**『心のふるさと祈りのお山、世界に冠たる高尾の自然』**と称され、多くの参拝者が来られています。

こうした恵まれた自然環境の中にある薬王院には、古来より僧侶だけではなく、広く一般からの篤志家が参加して行われる、多くの年中行事が伝承されております。**高尾山慶賛会**は、こうした各種の行事を奉賛し、以て御本尊を尊信し、その御加護を仰ぎ明るく暖かく、そして豊かな生活を送ることを目的とするものであります。

ぜひとも茲に広く高尾山慶賛会員を募り、ご加入御協賛を頂き、御本尊様の威神力に浴されますよう念願するものであります。

侍衣装を着た慶賛会の皆様

お申込・問合せ

年会費　一口五千円

申込方法　お手数ですが「高尾山慶賛会係」までお問い合わせ下さい。申込用紙を発送致します。

〒一九三-八六八六
八王子市高尾町二一七七
高尾山薬王院「慶賛会事務局」
TEL　〇四二-六六一-一一一五
FAX　〇四二-六六四-一一九九

郵送御護摩申し込み受付について

高尾山では大本堂に於いて、毎日御護摩修行を行っております。遠方の御信徒や、参拝できない御信徒の皆様の為に、御護摩札の郵送をお受けしております。

手紙、FAX等での申し込みをお願いしておりますが、「高尾山薬王院公式ホームページ」内の御護摩祈祷の御案内からインターネットにて、直接お申し込み頂くことが出来ますので、是非ご利用頂きますようお願い申し上げます。

お問い合わせ先☎〇四二-六六一-一一一五
「郵送御護摩係」まで

七五三身上安全祈願

「七五三」とは、皆様方の可愛いお子様が、これから健康にすくすく育ちます様に、又、交通事故などに遭わないように、との願いを込めて寺社にお参りするという行事です。

高尾山でも御本尊・飯縄大権現様の御加護を願い、毎年多くのお子様がお参りに訪れております。十月～十一月の間、山上「御護摩受付所」にて、「七五三祝い子育て祈祷」を受け付けております。

どうぞ皆様で御来山なされますよう、ご案内申し上げます。

※十一月中の土・日・祝日には大変な混雑が予想されますので、時間に余裕を持って早めの御来山をお勧めしております。

第百十七回　高尾山信徒峰中修行会　十月十二日(土)～十三日(日)

【高尾山信徒峰中修行会】を十月十二日～十三日に開催します。

高尾山に広がる大自然全体を修行道場として、高尾山御本尊・飯縄大権現様に身をまかせ、古来より伝承される修行の方法を実践し、激動の現代社会に生きるご自身の心の波を静めてみませんか？

当山独自の滝行、般若心経を唱え続ける千巻経、講習会等も実践いたします。

老若男女を問わず初心者の方も歓迎します。

参加ご希望の方は、ハガキに郵便番号・住所・氏名・フリガナ・年齢・性別・生年月日・電話番号を明記してお送り下さい。（尚、小学生以下の参加は保護者の同伴が必要となります。）

皆様方のご参加をお待ち申し上げております。

＊お電話にての申込みはご遠慮下さい。

＊請書は、申込締切後、発送致します。

日程表

10月12日		10月13日	
8:00	高尾山麓不動院集合・受付	5:00	起床
8:30	お授け	5:30	朝勤・朝作務
9:30	開催式	7:30	朝食
10:00	回峰行	9:00	講習
11:00	両滝にて水行 ※男女で分ける	11:00	昼食
12:45	両滝道場出立 十一丁目茶屋にて合流	12:00	下山
13:45	六凡行開始	14:00	柴燈大護摩供
15:45	山頂到着	15:00	閉会式
17:00	千巻経		
18:15	薬王院坊入		
18:45	夕食		
19:15	風呂		
21:00	就寝		

宛先　〒一九三―八六八六　八王子市高尾町二二七七　高尾山信徒峰中修行会係宛

電話　〇四二・六六八・二二五

FAX　〇四二・六六八・四二九九

申込締切　十月四日(金)

参加費　大人　一万五千円　子供　一万円(小学生以下)　＊保険料含

申込み後、キャンセルの方は、早めに電話連絡を入れて下さい。連絡なき場合は、キャンセル料等がかかる(発生する)場合がございますので、ご了承下さい。

集合場所　高尾山麓不動院　午前八時集合

服装　運動着　運動靴(サンダル不可)

持参品　弁当(初日昼食分)　雨具(傘不可)　洗面用具、タオル、寝間着、リュックサック　筆記用具

＊お持ちの方は、念珠、錫杖をご持参下さい。

高尾山内八十八大師巡拝のご案内

多くの方が参拝できますよう左記のように二つのグループに分け、途中(山上十一丁目茶屋前第十七番札所)で合流し、いっしょに巡拝致します。

A、不動院から蛇滝を経由して薬王院まで歩く

B、ケーブルを利用する。

※ケーブルを利用する場合、代金は自己負担になります。

日程　十月八日(火)

行程　山麓不動院→蛇滝コース→蛇滝→仏舎利塔法楽→本堂(護摩修行)→坊入(昼食)→下山(一号路)→不動院着(法楽)→解散

参加費　五千円(昼食代、保険料含む)

集合場所　山麓不動院(八時集合)

申込方法　ハガキに郵便番号、住所、氏名、生年月日、性別、電話番号を明記の上、左記までお申込み下さい。

申込締切　十月四日(金)

〒一九三―八六八六　八王子市高尾町二二七七　大本山高尾山薬王院　八十八大師係

＊電話でのお申込みは承り兼ねますのでご了承下さい。

＊申込締切後に、請書をお送り致します。

御本尊・飯縄大権現様との御縁を深める

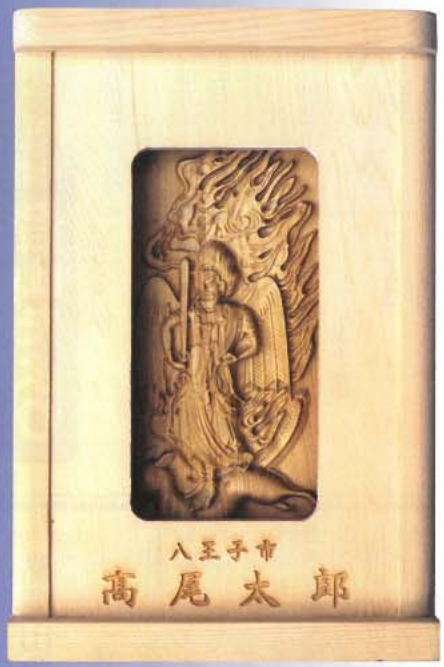
大本堂内 結縁「内陣御納佛」奉安のご案内

高尾山では、御信徒様と高尾山御本尊・飯縄大権現様との益々の御縁が結ばれますように、大本堂内陣に御本尊様の御魂を宿した「内陣御納佛」の奉安を皆様にお勧め申し上げています。

お申し込みになりますと、御納佛との尊い結縁のしるしとしてご芳名を刻み、大本堂内陣壁面に奉安され、幾久しくご繁栄を祈念するものであります。

また、御納佛が壁面に満たされますと、その都度、内陣格子奥に移し大切に安置されるものであります。

御納佛冥加料　一体　五萬円



高さ13.5センチ　横幅9センチ

院内散歩 31

～薬王院の展示物～

木版画『銀閣寺参道』
作・井堂雅夫

高尾山報助成金志納者

御芳名(順不同・敬称略)

伊勢原市　佐々木　晋介
江東区　上野　裕子
新座市　彰山　粧麗
〃　髙橋　久子
品川区　伊藤　誠規
八王子市　鈴木　忠良
台東区　熊切　房子
茅ヶ崎市　椎野　佳子
あきる野市　山崎　右三
相模原市　髙麗　良雄
比企郡　戸口　朋幸
葛飾区　遠藤　竹次郎
秩父郡　内海　照文
高尾山健康登山者一同

登山だより

■十月行事日程■

一日～七日
聖天秘供(聖天堂)

十一日、二十三日
弁天様御縁日

四日
中興俊源大徳忌

八日
仏舎利塔詣り(仏舎利塔)

十五日、二十八日
御詠歌勉強会
(十時山麓不動院)

十二日～十三日
信徒峰中修行会

十七日
高尾山秋季大祭
お練り供養
大護摩供法要(大本堂)
柴燈大護摩供(有喜苑)

二十六日
月例写経会
(十三時山麓不動院)

二十七日
高尾山とんとんむかし
「語り部の会」
(十二時半山麓不動院)

二十八日
奥之院開扉供養
(十時奥之院)

二十一日
飯縄様御縁日
神徳報謝百味飲食供
(九時大本堂)
○御本尊様の日々の御加護に感謝し、百味のご供物を捧げて供養する法要です。
皆様の御志納を受け付けておりますので、ご希望の方は大本堂までお申し出下さい。
御志納金　一口三千円以上

毎日のお護摩奉修時間

(4月15日～10月31日まで)

午前5時30分
〃　9時30分
〃　11時00分

午後0時30分
〃　2時00分
〃　3時30分

ご講中・団体等御相談下さい。

高尾山の昆虫 119

ホソオチョウ

最近、外来種の移入や定着がいろいろと社会問題になっています。

ブラックバスやブルーギル、アカミミガメ、カミツキガメ等が大繁殖して生態系を乱し、日本固有の生物の種(しゅ)の存続さえも脅かしている状況です。

虫の世界でも同様で、クロジャコウカミキリが分布を急速に拡げていて、サクラの被害が極めて顕著になり特定外来生物に指定されました。

蝶の仲間でも、従来は日本には生息していなかったホソオチョウが一九七〇年以降、局地的に発生していることが知られています。

高尾でも見られますホソオチョウはアゲハチョウの仲間で、小ぶりながらも後翅の尾状突起が細くて異様に長いのが特徴です。

オスメスで体色が異なりオスは全体的に白勝ちの清楚な色彩ですが、メスはやや濃い薄墨色に覆われ区別は簡単につきます。

本種は外来種であり生態系に及ぼす影響が考えられますが、美麗種であることから容認される動きがあり、意図的に違法な放蝶が繰り返されていると考えられ、外来種を語る上で問題提議の俎上(そじょう)に載せる(議論する)べき現状だと思います。

(文 松島　孝　撮影 上村　雅昭)

消費税率改定に伴う価格改定のお知らせ

令和元年十月一日より、消費税率改定となります。これに伴い当院におきましても、誠に恐縮ながら、送料を含む各種商品の価格改定を行います。

御信徒様にはご負担をおかけいたしますが、何卒ご理解を頂きますようお願い申し上げます。

訂正とお詫び

先月号「観音菩薩の宗教⑳」中の十一ページ第四段二行目にあります、「ためとされる。」を「ためだったとされる。」と訂正させて頂きます。

茲に謹んでお詫び申し上げます。

発行所
東京都八王子市高尾町2177
大本山
高尾山薬王院
郵便番号 193-8686
電話(042)-661-1115㈹
FAX(042)-664-1199
発行人 菅谷秀文
編集人 渋谷秀芳
印刷 ヒラツカ印刷社
毎月1回1日発行
1部50円

高尾山薬王院ホームページ
http://www.takaosan.or.jp